

売茶翁の人物像 かたきうちせんちやのはじまり —山東京伝『復讐煎茶濫觴』を通して—

北村拓海

煎茶の中興の祖である 売茶翁^{ばいさおう}（延宝 3〔1675〕年～宝暦 13〔1763〕年）を研究すれば、日本茶文化の一つである煎茶の文化の歴史や発展が見えてくる。しかし、日本茶史という大きな枠の中で、煎茶について触れていても、「売茶翁」についての議論は決して多くない。本研究は、近世文学の作品を通してみる近世期の茶文化研究の一環であり、実態を明らかにする。本発表では、戯作者 山東京伝^{さんとうきょうでん} 作の『復讐煎茶濫觴』^{かたきうちせんちやのはじまり}（文化 2〔1805〕年）を元に、売茶翁は江戸中期の人にとって、どのようなイメージを持っていたのか、変遷を辿っていき検証し、人物像の時代における変化についての理解を深める。

本作品は主人の 巻田内喜^{まきたないき} を殺された家来である芝山勇助が売茶翁と名乗り、茶を売りつつ、その敵を探すという物語である。本作品と売茶翁のイメージを一般的に定めた文筆家の 伴蒿蹊^{ばんこうけい} 著（享保 18〔1733〕年～文化 3〔1806〕年）の『近世畸人伝』（寛政 2〔1790〕年）の売茶翁像と比較し、その関係性と売茶翁の位置付けを明らかにする。また、売茶翁の肖像画が『復讐煎茶濫觴』の最後にも描かれている。現在まで知られている売茶翁像を描いた画家伊藤 若冲^{じやくちゆう}（正徳 6〔1716〕年～寛政 12〔1800〕年）の売茶翁像と比較すると、京伝の売茶翁像とは大きく異なっている。その原因は京伝が煎茶人としての売茶翁ではなく、想像する抹茶道の茶人を描いたのではないだろうかと言え、仮説を提供する。当時、煎茶道と抹茶道は混合していたので、千利休を彷彿させる格好をしている。結論として、売茶翁は江戸中期に活躍した煎茶の中興の祖として有名だったが、抹茶人の姿と混合していたといえる。本研究は、売茶翁のイメージやキャラクターの変遷の意義について論じる。